

研究課題	いきいきとコミュニケーションを図り、課題を解決しようとする児童の育成
副題	～CLILを通して世界とつながる力を育てる教育課程の開発～
キーワード	研究開発学校 CLIL コミュニケーション 教育課程 国際力
学校/団体名	公立東村山市立久米川東小学校
所在地	〒189-0003 東京都東村山市久米川町 2-40-10
ホームページ	<a href="https://www.fureai-cloud.jp/e14-kumegawahigashi/">https://www.fureai-cloud.jp/e14-kumegawahigashi/</a>

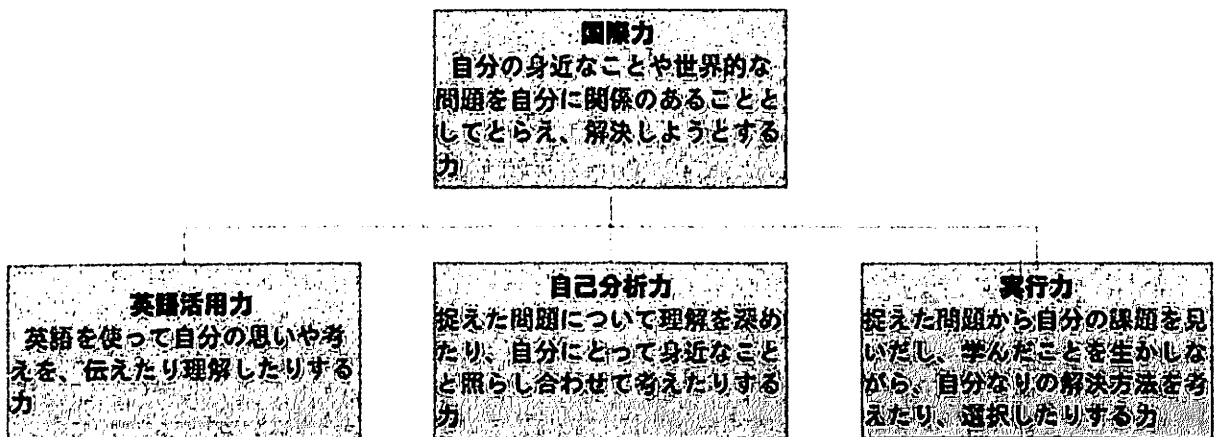
## 1. 研究の背景

本校は、文部科学省研究開発学校の指定を受け、今年度3年次の取り組みとなる。これまで、自身にとって身近なことや世界的な問題を自分に関係あることとして捉え、コミュニケーションを通じて周囲と協力しながら解決しようとする児童を育成し、その方法を明らかにする教育課程の開発実践を進めてきた。

## 2. 研究の目的

児童がコミュニケーションを通じて周囲と協力しながら解決しようとする力を高めることが重要である。本校では、その力を「国際力」と定義し、国際力を身に付ける上で元となる三つの資質能力を、「英語活用力」「自己分析力」「実行力」と設定した。

**国際力を身に付ける上で元となる三つの資質能力**



本研究では、豊かなコミュニケーション能力の育成と各教科等における質的学力の向上を目指す。とりわけ、国際力を育むためには文化の違う他者の存在が必要であり、その違いを理解したり、認め合ったりすることが求められる。そこで新教科「eタイム」では、教育課程の編成、授業における指導法及び評価計画の研究に取り組みと、他者と意見や考えを伝え合う機会を大切にできるよう、以下の三点を研究開発し、実践する。

1 点目は、CLIL (内容言語統合型学習) の指導法を用いた新設教科「eタイム」の実施である。外国語学習と各教科等における内容とを統合して学習する時間「ロングeタイム」とロングeタ

イムに学習した表現や単語に繰り返し触れ、既習事項の定着を図る時間「ショートeタイム」を設定する。2点目は、電子辞書やタブレット端末を活用し、コミュニケーション活動や「読むこと・書くことの慣れ親しみ」に対して主体的な学びを促していく。3点目は、遠隔教育システム（HD コムや zoom など）を導入した共同研究・開発である。

### 3. 研究の経過

#### (ア) 研究仮説

研究を進める上で、理想とする児童像を描くことからスタートした。児童の興味関心や特性に応じて、外国語学習と各教科等の学びを統合した CLIL の指導方法を取り入れた研究開発を行い、学習課題を自分に関係のあることとして捉え、英語に触れながら考えたり表現したりすることで、暗記や理解だけに偏ることなく、思考を伴うコミュニケーション活動を行うことができる考えた。そして、学習言語と日常言語の両方用いた意味のあるコミュニケーション活動の積み重ねが、豊かなコミュニケーション能力及び各教科における資質・能力の育成を図りながら、国際力を身に付けた児童を育成できるであろうという仮説を立てた。

#### (イ) 内容について

研究開発学校の指定を受け今年度3年目を迎える。教育課程の特例を認められ、開発をしている新設教科は以下のとおりである。

##### ① 教育課程（編成した特徴）について

本研究では、豊かなコミュニケーション能力の育成と各教科等における質的学力の向上を目指し、新教科「eタイム」を設置し、教育課程の編成を以下のように行った。今年度は、部分実施を行い、検証を行った。実施状況は以下に示した通りである。

- ショートeタイム…表現や単語に繰り返し触れ、既習事項の定着を図る時間。

（金曜日 8：25～8：40に実施）

- ロングeタイム…英語を通して、各教科等の学習内容や新たな学習について深める時間。

外国語活動（第1・2学年）…10時間実施。

※なお、第1・2学年について現行の学習指導要領には外国語活動が示されていないため、第3・4学年に示されている現行の外国語活動の解説に準ずる。

##### ② 必要となる教育課程の特例

- ・第1・2学年では、「生活科」より35時間、第3・4・5・6学年では、「総合的な学習の時間」よりそれぞれ35時間を削減し、新教科「eタイム」を設置する。
- ・新教科「eタイム」の第1・2学年では、地域の生活や社会及び自然に関わることや、具体的な活動を通して気付いたことや考えたことを英語（言葉）で表現していくことを重視するため、生活科の授業時数の一部を新教科「eタイム」に充てる。
- ・新教科「eタイム」では、外国語学習と各教科等の学習を統合していくため、第1・2学年では、「生活科」より削減した35時間のうち、10時間を「外国語活動」の時間に充て、実施する。
- ・新教科「eタイム」での学習効果を高めるために、各教科等の指導時期や内容を修正し、

新教科での学びを各教科等の学習にも生かせるようにする。

- ・新教科「eタイム」の第3・4・5・6学年では、各教科等および外国語活動・外国語における見方・考え方を総合的に働かせながら、「課題に設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探求的な学習を展開させていくため、総合的な学習の時間の授業時数の一部を新教科「eタイム」に充てる。

③ 新設教科「eタイム」について

<目標>

各教科および外国語活動・外国語における見方・考え方を働かせ、英語で学び英語で伝える言語活動を通して、自分の身近なことや世界的な問題を自分に関係のあることとして捉え、コミュニケーションを通じて周囲と協力しながら解決しようとする資質・能力を育成することを目指す。

※見方・考え方を働かせるとは

「小学校及び中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」の中で、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点に立った授業改善を行うに当たっての具体的な内容として、以下のことが示されている。

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点に立った授業改善を行うに当たっての具体的な内容

- 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

- 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

- 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

(ウ) 今年度の取り組み

日時	主な内容
4月7日(水)	研究についての共通理解 主題・副主題や研究内容の話し合い
28日(水)	遠隔教育システム(HDコム)の活動計画 児童アンケートの検討
5月26日(水)	CLIL 模擬授業 単元指導計画の加筆修正の方法
6月16日(水)	★授業研究1「eタイム」第5学年「水の大切さを考えよう」 講師：玉川大学大学院教育学研究科特任・名誉教授 佐藤 久美子 先生
6月17日(木)	第1回児童アンケートの結果と考察
8月31日(火)	来年度実施予定の単元指導計画の作成状況確認
9月29日(水)	来年度実施予定の単元指導計画についての指導講評①②
9月30日(木)	講師：玉川大学大学院教育学研究科特任・名誉教授 佐藤 久美子 先生

11月16日(火)	東村山市内小学校との交流授業(第4学年)
11月~12月	静岡県川根本町の小学校とのオンライン交流授業(全学年)
12月7日(火)	文部科学省実地調査 授業1:eタイム 第1学年「しっかりたべよう」 授業2:eタイム 第3学年「食べ物のひみつを教えます」 授業3:eタイム 第6学年「Heal The World. ~世界を幸せにしよう~」
12月15日(水)	★授業研究2「eタイム」 第4学年「Living with creatures ~生き物と共生していくために~」 講師:東村山市教育委員会
1月26日(水)	★授業研究3「eタイム」第2学年「What is your mottainai?」 講師:玉川大学大学院教育学研究科特任・名誉教授 佐藤 久美子 先生
2月8日(火)	国際力を育む3つの資質能力についての共通理解
2月21・22日	静岡県川根本町視察
3月4日(金)	CMCプロジェクト:ノルウェー王国駐日大使との国際交流
3月16日(水)	来年度の計画 課題の確認

#### 4. 代表的な実践

実践例① 第1学年	
eタイム(開発教科)	単元名 しっかりたべよう<3時間> (S 3時間+L 2時間)
単元の目標と概要	
<p>【英語活用力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特定の食材が好きかどうかや好きな食材を尋ねたり答えたりする。</li> </ul> <p>【自己分析力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食べ物の働きを知り、栄養バランスについて考える。</li> </ul> <p>【実行力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・給食に使われている食材やその働きについて興味・関心をもったり、給食時の自分の食べ方について振り返ったり自分の食生活に生かそうとする。</li> </ul> <p>&lt;単元について&gt;</p> <p>本単元は、児童が、英語に親しみながら、食べ物の三つの働きの大切さを知り、自分の食生活に生かそうとする食育の内容(学校給食を扱った)学習である。英語活用力については、これまでのeタイムや外国語活動で慣れ親しんだ表現を使って、自分が好きな食べ物を伝えたり、特定の食材が好きかどうか尋ねたり答えたりする力を身に付けさせる。自己分析力については、誰にでも苦手な食べ物があることを知るとともに、食べ物の働きを理解する中で、バランスよく好き嫌いしないで食べる大切さを考えられるようにする。実行力については、学習を通して自分の食生活を見直し、苦手な食べ物も頑張って食べようという意欲をもてるようにする。このようにして、第1学年では、自分の課題を明確にし、解決できるようにす</p>	

<p>ることが、今後、世界的な問題を自分事として捉え解決しようとする国際力を育むことにつながると考える。</p>
<p><b>研究の成果と課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年生という発達段階的に、英語と日本語の境界線があまりない。教師が言った英単語を自分が聞いたことある言葉に結び付けて反応している様子があった。</li> <li>・ 「緑は green って言うよ。」「赤は、red だよ。」というような説明をしなくても、教師が繰り返し英語を言うことで、初めは日本語で「緑!」「赤!」と反応していた児童も、「Green!」「Red!」と自然に英語で反応するようになった。</li> <li>・ 英語（外国語）を習得するには時間がかかる。間違いながら身に付けていくので、「間違ってもいい。」という雰囲気（学級経営）が大切である。</li> </ul>

<p><b>実践例② 第5学年</b></p>	
<p>e タイム(開発教科)</p>	<p>単元名 水の大切さを考えよう&lt;9時間&gt; (S 3時間+L 8時間)</p>
<p><b>単元の目標と概要</b></p>	
<p><b>【英語活用力】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地球の環境を守るために、自分たちができることを reuse/recycle/reduce / refuse を使って表現することができる。また、オリジナルのエコマーク・エコラベリングに込めた思いを英語で伝え合うことができる。</li> </ul> <p><b>【自己分析力】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界や日本が抱えるごみや環境問題の現状について知り、自分の生活と照らし合ったり他者と関わり合ったりしながら、類似点や相違点を分析し、課題を見出している。</li> </ul> <p><b>【実行力】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界や日本が抱えるゴミや環境問題などの解決に向けて、生活の中で自分にできることを考え、オリジナルのエコマーク・エコラベリングに表して、提案している。</li> </ul> <p>&lt;単元について&gt;</p> <p>本単元は、4年・社会科「水はどこから」や、5年・社会科「世界の中の国土」、5年・総合的な学習の時間「米から見えてくるもの」など、様々な科目の内容から統合している。手洗いなどが生活の中に強く結びついているコロナ禍の今、当たり前のように水を使っている日本だが、水不足が原因で命を落とす世界の国もあり、水は人々の命を支える重要な資源である。そんな身近な水という資源が、世界規模の課題であることを実感させることで、自分たちの生活を見直し、節水への意識について英語を用いながら表現することを目標としている。世界規模の課題を自分自身の課題と捉えることができるよう、日常の生活から水を使用する場面を繰り返し英語で習得することを意識した。また、外国語の授業で学んでいる writing の力を活かすため、簡単なポスター作製を設定した。水が豊かな国である日本だからこそ、日頃気付くことができない水の大切さを知ることが最大の学びであり、節水について理解を深めることができたらと考える。</p>	
<p><b>研究の成果と課題</b></p>	

- ・言語と内容のバランスが取れている。日常生活で馴染みのある表現を使うことで、難しい単語でも活用しやすかった。完璧に内容を聞き取ることは難しいが、馴染みのあるものなら予測、推論して考えることができる。CLIL で使用する言語について、教師が専門家である必要はない。したがって教室では、言語が「通じて」いればよいが、内容についてはしっかり把握し、きちんと評価することが大事である。
- ・キーセンテンスであった “How much water do you use a day?” をチャンツとしてひとまとまりで練習できているのがよかった。チャンツの後にしっかり発音することが大切で、何回も繰り返しながら表現を練習できていたのもよかった。
- ・一日に使用している水の量を、英語を使用して計算するという CLIL の学習ができていた。CLIL は他の科目にもよい影響がある。

## 5. 研究の成果

3 学期の児童アンケート調査で「英語で話すことが好きか」という質問に 1 学期末に比べて全ての学年において肯定的な回答をする割合が増えた。ショート e タイムで慣れ親しむ時間を確保して自信をつけ、校内にとどまらない多様な人々とのやりとりにより主体性が引き出され、英語に対する主体性も高まったと考えられる。「自分や相手の意見を比べて似ているところや違うところを見つけることができるか」という質問に対しても、肯定的な回答をする児童の割合が増えた。様々な意見や考えが表出されるような内容を扱ったことで、多様な考えに触れる機会が増えたことで成長を実感する児童が増えたと考えられる。

## 6. 今後の課題・展望

来年度は研究開発学校としての研究の最終年度をむかえる。大きな目標は今年度同様「国際力」の育成とし、その資質能力についても「英語活用力」「自己分析力」「実行力」という 3 つの柱にする。今年度課題に挙げた児童にとって分かりやすい内容にすることや英語の語彙表現の精選を行いながら、単元指導計画を見直して実施する。研究発表も控えているので、本校の取り組みがより伝わるような授業公開を行うことに向けて準備を進めていく。

## 7. おわりに

一昨年から続くコロナ禍でのコミュニケーション活動を重視した研究課題の遂行は困難を極めた。しかし、学びの継続を確保すべく教育の ICT 化が推進されたことは、本校の研究にとって大きな後押しとなった。ハード面の整備が 3 年間前倒しされたことで、既に配備されているテレビ会議システムに加え、一人一台のタブレット端末が配備され、遠隔交流は昨年以上に手軽に実現可能になった。静岡県川根本町の小学校との交流は 2 年目を迎え、児童の距離感も縮まり密度の濃い関係作りが進んだ。また、本校の研究成果を市内へ還元することを目的とした市内秋津小学校との外国語交流では、教員の端末操作スキル向上も相まって、気軽に双方向で発表することができた。今後も明るく素直で実直な本校の児童の良さを伸ばすべく様々なアプローチの手段を探る必要性を感じている。